

JESUS

JONES

BLISSED BLISSED BLISSED

MIKE EDWARDS INTERVIEW

初めてギターを手にした時は、
別世界へのパスポートを
取ったような気がした

普通のロック少年が、下積み生活を経てハウスと出会い、
全米で大成功を収めるまで
苦勞を苦勞と思わない
マイク・エドワーズのあくまでも前向きな半生記

インタビュー●大谷英之
協力●河原雅子

AC/DC、パブリック・エネミー、ダイナソー・JR、ライド、
ミスフィッツ、ブギ・ダウン・プロダクションズ、ソニック・ユース。
ジーザス・ジョーンズ2度目の来日公演で
ファンが着てきたTシャツのラインナップである。
勿論、その多くはジーザス・ジョーンズだったが、
こんなに多種多様な人たちを集められるようになった、
それだけで彼らがいかに成長したかを象徴的に示していた。
そんな音楽的成果と共に全米でもブレイク、
"ライト・ヒア、ライト・ナウ"がトップ10にランクされたジーザス・ジョーンズ。
が、これにしても'88年にバンドを結成してからあつという間に成功を獲得したのではなく、
実はそれまでに幾多の試行錯誤があったのである。
その過程から現在までを中心にした、
マイク・エドワーズ/ジェン&パリー・ロ・インタビュー/ライヴレポートの来日特集!



キサイトしてたよ。オーディエンスの数がもっと少ない時もあったけど(笑)。ここまで来たからにはもう引き返さないって思った。まだまだ先があるんだってね。今でもそう思ってるよ」
 ●この頃、スティーヴ・アルビニのギターがとにかく気に入ったそうだけど、それはどんな部分に惹かれてたんですか。
 「彼のサウンドはとても変わってたからね。普通のサウンドとは違って凄くアグレッシブだった。そこが好きだったよ。イギリス人は音楽に対してイギリス以外の国には何もなかったようにさえ思ってる傲慢なところがあるけど、他の国にもいい音はあるはずなんだ。一歩イギリスの外へ足を踏み出してみればわかるはずさ」
 ●ソングライター、ヴォーカリスト、ギタリスト、プロデューサー、あなたはこれだけの顔を持ってますが、この中で今、優先順位をつけるとしたらどうなりますか？

「まゾングライターだろ。ヴォーカリスト、ギタリスト、プロデューサー……うん、今言ったその順番だな(笑)」
 ●で、この後の「リキダイザー」〜「ダウト」まではもう誰かが知ってるおと、バンドがどんどん大きくなって……今は「ダウト」が全英1位、「ライト・ヒア、ライト・ナウ」が全米で10位と大ヒットとなりましたが、このあまりに急激な成功にとまどった部分がありますか。
 「いや、そんなことはないな。当事者からすれば実際はどんなに急なことも物事はゆっくりと感じるものなんだ。そうだなあ……もしこれがファースト・シングルだったら、この次の曲をどうしようとか不安になったかもしれないけど、今までにシングルは何枚も出してきたし、アルバムとしても2枚目だから早かったとは思わないよ」
 ●結局ストーン・ローゼズやハッピー・マンデーズよりも早くアメリカで成功しちゃいましたよね。

これについてはどう思いますか？
 「僕たちはイギリスだけでの成功に満足していない数少ないバンドだからかな。シーンやトレンドの部じゃないから、その分他の国の人も僕たちと共通点を見つけやすいのかもしれない」
 あとプレスだね。イギリスのプレスの問題は強い影響力を持ってることなんだ。N.M.E.なんかはオーストラリアでもアメリカでも日本でも読まれてる。そして「このバンドは最高だ！」って書いてある記事をみんなが読む。それが必ずしも正しいことじゃないにしても読者はその記事を読むだけで、そのまんまショーを覗くに行くし、それまでいいと思ってたバンドのイメージと違って困惑させられる部分があると思うんだ。例えば、ハッピー・マンデーズやストーン・ローゼズは僕たちの2倍以上もプレスに出てるし、レビューも彼らの方が2倍いい。僕たちの記事はいつもいってわけじゃないしね。そんな状況で、ラ

ラスト・ナンバー「プリスト」で「君も輝いてる。君も、君も」とオーディエンス一人一人を指して終わったジーザス・ジョーンズ？ 回目の来日公演。押すところは押し、引くところは引く——ハウスからスラッシュ・メタルまで取り込み時代の先端を行くと自負している彼らにしては、オーソドックス過ぎる程起承転結のはっきりしたステージ構成だったが、僕にはそうした正攻法が逆に新鮮で感動的でした。ロックンロールという言葉が手垢にまみれ消耗していったように、そのある種定型的化したコンサート形態もすたれていった1991年。そして、あらゆるスタイルが出尽くした今、そのポテンシャル/エネルギーを落とさずに「ロック・コンサート」をもう一度呼び戻そうとしたら、ジーザス・ジョーンズくらい自由度の高さを要求される。そんな今のライブの在り方も証明していたステージだった。古典的でありながら全く古臭さを感じさせない、これもバンドの力量があればこそである。

さて、そういった新しさと古さが同居したマイク・エドワーズ。彼のそんな価値観はどのようにして育まれていったのか？ これが今回の取材テーマである。普通の子供だったという幼少時代から、ロックに目覚めバンド結成〜ジーザス・ジョーンズまで、そしてもちろん本誌好評連載中のシングル・レビューについても語ってもらった。

●まず、どんな家庭に生まれ育ったんでしょう？

JESUS JONES 15の時からプロを目指してたけど、約10年間は収入がなかった

「中流家庭でね。母は看護婦で父は……あまり詳しく知らない(笑)。オフィスでの仕事っていうのは確かだ。もしかしたら、僕が知らないだけでCIAだったりして(笑)」
 ●(笑)少年時代はどういう子供でしたか。
 「矛盾するようだけど、僕はシャイであると同時に外向的で注目されたがってました。学校に通い始めた頃はとてもおとなしかったのに、だんだん賑やかになっていったんだ。その頃はごく普通のことを考えてたよ。イギリスらしくサッカーの選手とか、電車の運転手、消防士になりたかった。自分はまわりの連中とは違うとも思ってたけど、それは人それぞれの個性のように誰もがそう思っていることだろうしね」
 ●お父さんが大のビートルズ・ファンで、お母さんは元ヒッピーだったそうですね。
 「ああ、両親からはいろいろな影響を受けたよ。金を払ってベビーシッターを頼むより、レコード・コレクションの中の1枚をかけて出かけていったぐらいだからね。60年代の子供は、僕のような育てられ方をした人ってけっこう多いかもしれないけど」
 ●そんな音楽だらけの家庭の中で、「これが自分の音楽だ！」って初めて意識して聴いたのは何だったんですか。
 「T・レックス、スウィート、スレイドだね。この3つは僕が好きなもので、両親はあまり好きじゃなかったし、本当にのめり込んだよ。僕は自尊心のある子供だったから、両親が聴いていた音楽は

大嫌いだったんだ」
 ●じゃ、ビートルズやストーンズが大嫌いだったってこと？
 「そう、あんまり頻繁にかけてたから聴き飽きたのさ。それに子供って親の価値観を拒否するところってよくあるだろ？ 当時ビートルズは親の世代を代表していたし、だから大ゲンカもしたよ。まあ、今じゃビートルズもストーンズも好きなように両親とも仲良くしてるけどね」
 ●初めて行ったコンサートは？
 「うーん……あんまりよく覚えてないなあ」
 ●でも、何かぐらいは覚えてるでしょう？
 「確か、ホワイトスネイク、だったかな」
 ●ええっ、ホワイトスネイクですか。誰にでもそういう過去はありますよ。僕だって最初はロッド・スチュワートだったんですから(笑)。
 「(笑)でも決していいキャリアのスタートじゃなかったよね。僕が住んでた所にはなかなかいいバンドが来なかったんだ(笑)」
 ●それで音楽を自分でやり始めたのはいつぐらいの時でした？
 「10代になってからありきたりのことはしたくないって思い始めたんだ。ロックには病みつきになっていく一方だったし、いろいろなものを聴いていくうちに「あの曲をプレイしたい」っていうふうになっていった。音楽だけじゃなく、例えばマーク・ボランなんかのグラマラスでエキサイティングな部分に惹かれたのさ。

で、初めてギターを手にして、プレイできるように練習した頃は、まるで別世界へのパスポートを取ったような気分でしたよ。僕はつまらない仕事はしなくていい、特別なんだって思ってたんだ。それからジェン(Dr)と出会って、最初のバンドを組んだのが'79年の12月だった」
 ●当時のイギリスはパンク・ムーブメントの直後でしたよね。あなたたちもやはりパンク・バンドからスタートしたんですか。
 「いや、ひどい単なるノイズとしか、いようがないね。ヘヴィ・メタルなのか、スカなのか、パンクなのかはわからない(笑)。その頃はジェンがシンガーで、具体的なスタイルは何もなかったよ」
 ●'84年にはアラン(B)が加入したそうだけど、この頃にはその単なるノイズから(笑)、どう変わりましたか？
 「まあ、プレイできるようにはなっていたから少しはマシになったよ(笑)。80年代のギター・バンドに近かったかな。でも、キーボードが代わりたりメンバー・チェンジはよくあった。ジェンとアランとはこの後もずっと一緒にやってたけど、そういえば、この頃から僕がギターからヴォーカリストに変わったんだ。けどそれに代わってギグまであと2週間しかないって時に前のヴォーカルが脱けたから、急遽誰かがやらなきゃって感じだったな」
 ●本格的にプロのミュージシャンを目指したのはいつ頃なんです？
 「15の時から。でも実際に音楽で収入を得られ



るようになったのは、ジーザス・ジョーンズからで、それまでは他の仕事をしながらずっとバンド活動してたんだ」
 ●それから、ハウスと出会いウェアハウス・パーティを体験して、ジーザス・ジョーンズのラインナップになるわけですが、この時はようやく自分のやりたいことの焦点が定まったって感じてましたか？
 「そうそう、'88年の夏、サンプリングを発見してからのこと。2〜3週間ほどバンドでやりたいことのアイディアが浮かんだ。まさに「これだ、やりたいことがやっとわかった」って感じていたんだ。'86〜'87年頃からヒップホップには興味を持ったからハウスをやるのも極く自然なことだったしね」
 ●しかし、デビュー当時のライブはわずか数人だった……。
 「(苦笑)ロック・ガーデンじゃあ8人だったかな。でもその時はレコード契約をもう少しでするところだったしエージェントも決まっていたからエ



したら、下手をすればそのファンにだって傷つける危険もあるわけですから……。
「そんなこと心配してる暇ないよ。だって、さっきの『過去のことはもういい。未来の方がずっと重要なんだ』という発言でも他の人に嫌われることがあるかもしれないし。とするとインタビューをやることだって危険なことかもってことになる。でも、僕はそんなの気にしちゃいない。やりたいことをやって、それを気持ちよく受け取ってくれたらいいんじゃないか」
●毎回締め切りを必ず守っていますが、ハードなバンドのスケジュールなのにいったいどう書いているんですか。
「ベルギーへ向かうバスの中で夜中の2時に書く時もあるし、サウンドチェックの時もあるよ。音楽はいつも聴いてるけど、何かしなくちゃいけないという状態に置かれると一生懸命になっちゃうんだ。この後も10月までいくつかのフェスティ

バルやアメリカ・ツアーと続いても、僕はいつでもOKだよ」
●音段ミュージシャンとしてステージに立ってるあなたが、他のバンドについての原稿を書くライターになってみて何か変わりましたか？
「基本的には同じだよ。どのみち僕は原稿に書いたような聴き方をしてるわけだし。要するに思ったことを『クロスビート』に書くか書かないかの違いだよ」
●原稿を読んでも気づいたのですが、あなたは古いオーソドックスな曲でもいいものはいっぱいという一方で、新しいことをやろうとしているアーティストの方を支持してますよね。やはり自分に何らかの新しい視点をもたらしてくれる音が昔から好きなんですか。
「そうだね。前進するっていうのはとても大切なことだと思う。人間の本質だろうな。もし新しくエキサイティングな音楽が出てこなかったらひど

くつまないだろうし。僕は退屈な人生なんて考えたくもない。だからこそ、何か新しいものを見つけると嬉しくなるのさ。それはジーザス・ジョーンズにしても同じで、ただ決まったことを繰り返すなんてことはしないんだ。変化することを知らない普通のギター・バンドやロック・バンドにはなりたくないね」
●ツアーで忙しいでしょうけど、来月からまたよろしくお願ひします。
「あれ？ 今月はやらないの？」
●え？ だって、昨日日本でもツアーが始まったばかりですよ。
「大丈夫、平気だよ。僕の方は音をくれればいつでもいいよ。この連載をやり始めた時から、ずっとツアーをしているのは変わってないんだから(笑)」
●わ、わかりました。さっそく手配します。【写真(か、結局本誌締め切りの都合上来月号からの連載再開となりました。お楽しみに)ノ

イヴを見てオーディエンスが自分たちなりの判断を下したんじゃないかな」
●つまり、そんなイギリスのプレスの評価がありそして実際のステージを聴いての結果だと？
「そのとおりさ。イギリスにはうまいライブ・バンドはそうたくさんいないからね」
●いつもながら自信満々ですね。確かに昨日(8月14日)のステージでもバンドがいかに成長したかを見せつけられましたよ。ヘヴィな部分はよりヘヴィにメロディアスなものよりメロディアスにと、バンドのレンジが更に広がったようですね。
「うん、オーディエンスの前でプレイしてるんだからそうなるよ。エネルギーやエキサイティングな部分を曲に取り入れていくんだ。レコードとライブは違うものであるべきだし、それはとても重要なことだとも思ってる」
●コンサートの最後にやった“プリスト”。この曲で“こんなに自分らしい気分になれることは他にない”と歌っているとおり、ステージの上が一番居心地いいんですか。
「そうだよ。僕の基本的なアティテュードだね。それが僕の生き方なんだ」
●話を元に戻しますが、今回の日本公演にしてもチケット完売、アメリカでの成功と、ジーザス・ジョーンズが89年にデビューしてからの躍進は、多くの人からすればそれこそシンデレラ・ボーイのように映ったと思います。けど、実際あなたがプロを目指したのは15の時でしょう。ようや

「今？ 最良の時だよ。少しまた落ちていきそうない気配もあるけど(笑)」
●それならとつと次の質問にいきます。最近「ダウト」では願っていたことが全部実現した」と言ってましたが、いつも“ネヴァー・イナフ”というあなたにしては本当に珍しいなと思ったんですけど。
「でも、それはアルバムを作った時点のことなんだ。僕はいつだって、いいことはたくさんある。音楽にしる歌詞にしる、時間が経てば経つほどね。そういう意味じゃ「ダウト」も僕にとっては古いアルバムさ。何たって1年半前の作品だから、リリースした時も既に新しいものじゃなかったんだ」
●今、「ダウト」を振り返ってみてどうですか。あの素晴らしいアルバムでも何か不満なんてありますか？
「もちろん作った時にはなかったけど、今はあるよ。“インターナショナル・ブライト・ヤング・シング”のサウンドはもう古いし、“ライト・ヒア、ライト・ナウ”のビートも今一つだね。“トゥー・アンド・トゥー”のサウンド・プロダクションもあんまり好きじゃない。曲を作り終えてから、けっこうすぐに録ったものもあったからね。でも1年前にレコーディングした作品を気に入らないっていうのは、極く普通のことだと思う」
●次のアルバムがどのようなものになるのか、何か構想があったら教えてください。

JESUS JONES 退屈な人生なんて考えたくもない/ だから新しいものを見つけると嬉しくなるんだ

くここまで来たなあ、なんて感慨なんてありますか？
「たとえあったとしてもそれはたいしたことじゃないよ。僕にとって重要なのは今と未来なんだ。過去のことなんてどうだっていい。今、ここで起こっていることやこれからのことに興味があるのさ」
●なるほど。これは前から聞きたかったことなんですけど、あなたは成功に対しても音楽においてもいつも自信に溢れてるでしょ？ 何かに対しての不安を少しも見せないけど、それはどうしてなんですか。
「それについては誰も聞いてこなかったし、またとても個人的なことでもあるからね。そういう部分はインタビューじゃ話さないし……」
●じゃあ、それを人に知られたくない/根っからの楽道家——このうちの二つに一つって言うたらどっちになりますか？
「うーん……(しばらく考えて)、大部分はやっぱり見せたくないからだね。もちろん、ひどく落ち込んで不安になることもあるよ。それで曲を書き始めて、書くことによってそこからすっきり立ち直るんだ。「ダウト」なんてそのいい例だよ。アルバム制作前の僕は日一杯泣いてたけど、曲を書きだしたらいいのができてきて、そして大成功した。おかげでここ半年間はすっかり自信がついて楽道家になったんだ。だからインタビューにもちようどいいよ。こういうのには周期があるんじゃないかな」
●今はどうなの？

「「ダウト」と同じような意味でコンセプトアルバムになるよ。「ダウト」の曲/アルバム全てにおいてクエスチョン・マークがあったようにね。もちろん今までの2枚のサウンドが異なったように、次も違ったものにしたいと思ってる。もっとロック・アルバム寄りになるんじゃないかな。まあ、作曲りを始めてみなきゃわからないけど」
●では、今後のジーザス・ジョーンズについてだけど、長期的にはどう考えているんでしょう？ 可能な限り長くやっていきたいのか、それともやりたいことをやったらさっさとやめるのか？
「音楽的にやり尽くしたらさっぱりとやめるよ。僕たちは全てのことが目まぐるしく変わっていくからこそ、現在そして近い将来のことに拘るんだ。もちろん、もう何も起こらなくなった、これで僕たちの音楽の歴史が終わると思うまではジーザス・ジョーンズをやり続けるよ。あとは僕がどれだけ長く興味を持つことができるかによるね。でも、もう何も言うことがなくなったらやめる。いつまでもダラダラやってても恥ずかしいし」
●長寿バンドの代表、今のストーンズなんてどう見えますか？
「ああ(と、溜め息をついて)、僕はあそこまではしたくないよ。自分を茶化すよりももっといい手段があるはずさ。時代が変わってきていることを認めてないんじゃないかな」
僕たちは今、面白い時代に生きているんだ。テクノロジーやコミュニケーションの方法などが発達したおかげで、世界はより小さくなってきている。



これは「インターナショナル・ブライト・ヤング・シング」のアイデアでもあるけど、来年はヨーロッパも統一されるしもっと他の国もいろんなことに巻き込まれていこうね。でも、社会におけるテクノロジーの役割が大きくなってきているわりに、ロックではまだその影響はさほど受けてないんだよ。ダンス・ミュージックじゃ既にいろいろ取り入れているけど」
●と評論家らしい意見が出たところで、本誌での連載の語にしたいのですが(笑)、毎月本当にありがとうございます。編集部もいつも楽しみにしててますよ。
「いや、僕の方もやらせてもらって嬉しいよ。ほんとに。「クロスビート」がこういう機会をくれたことにも感謝してるくらいさ。僕にとってもバンドにとってもプラスになってるからね」
●でも、この連載をよく引き受けてくれたと思いましたよ。だって、あるバンドのシングルをけな

ルーズなノリとうねりを叩き出す ラブなロックンロール

6月16日 / 新宿パワー・ステーション

文●岩崎隆一



JERRY DE BORG

5人か個々のミュージシャンとしてね」
 B「僕たち5人の個性は強いから各々違うんだ。最近のインディ・バンドみたいにメンバー全員が同じタイプの音楽を聴いてるわけじゃない。それに例えばキューアミみたいなバンドとも違うね。ロバート・スミス以外のメンバーを知ってる奴なんていないけど、ジーザス・ジョーンズはそうじゃないんだ。他のメンバーもそれなりの力を持っていると思う(笑)」
 ●(笑)じゃあ、そうやって曲が作られていくのなら、「ダウト」の時マイクが持ってきた曲の幅広さにはみんな驚いたでしょ？
 B「うん、他の人には思いもつかなかった僕たちのいろいろな面を引き出したよね。「ダウト」では、曲そのものを鑑賞したかったし、あとジーザス・ジョーンズのサウンドはいくつも層になっているからそれだけたくさんあることも見せたかった。バンドをより深くしたアルバムだね」
 ●ソングライター/ミュージシャンとしてのマイク・エドワーズをどう評価します？
 G「マイクのプレイと作曲には一目置いてるよ。彼は並はずれた才能の持ち主だね。もちろん、尊敬もしてる」
 B「ミュージシャンとしては本当に素晴らしいと思う。ソングライターとしてもかなり才能はあるけど、まだまだこれからもよくなっていく余地はあるんじゃないかな。曲を書くっていうのは、物の考え方や生きていく中で学んだことか反映されるわけだからね。年をとると共にもっとよくなっていくはずさ」
 ●最後に今後のジーザス・ジョーンズについて、可能な限り長くやっていきたいか/音楽的にやり尽くしたらさっさとやめる。どっちでしょう？
 G「もうまくいかないとなったら、誰よりも早くそれに気づいてさっさとやめるよ。僕たちは自分に対して厳しい評論家でもあるんだ」
 B「アーティスト的な部分は枯れるまで、僕はそうなるまでは可能な限りは続けるよ」



す、ラブなロックンロール・バンドなのであった。「リキタイザー」の曲はともかく、中心となった「ダウト」からのナンバーで特にそれは強く感じられた。やっぱりロック・バンドは生で観ないと実感が分らない、という鉄則を改めて思い知らされました。唯一にして最大の不満は、音がえらく小さかったこと。最初から最後まで冷静に「音質」出来てしまったのは困りものだ。他の日は普通にアカかったそうなので嬉しい。まあ、バンドランドに曲を重ね、ライブは変わった。最初のヘリ

征者は前回の初来日公演を部々の事情(貧乏だったからなんて言えるか)により観ていないので、今回がジーザス・ジョーンズのライブ初体験だった。退屈部の方々と顔を合わせる度に「えっ、あれを観てないんですか」と微妙なまなざしを投げかけられるのは実に辛かった。これでそんな生活とも違におさらばである。めでたい。
 ともあれ、彼等のライブがどんなものであるかは、「ダウト」のリリース直前に出た5曲入りライブEPやTV出演時の映像などでその片鱗を一部明瞭的に知ることは出来た。しかし、それらはアルバム

の音から最後に響いたバラス音まで1時間強、全17曲という内容。随のねえちゃんが「短くないので、今回がジーザス・ジョーンズのライブ初体験だった。退屈部の方々と顔を合わせる度に「えっ、あれを観てないんですか」と微妙なまなざしを投げかけられるのは実に辛かった。これでそんな生活とも違におさらばである。めでたい。
 ともあれ、彼等のライブがどんなものであるかは、「ダウト」のリリース直前に出た5曲入りライブEPやTV出演時の映像などでその片鱗を一部明瞭的に知ることは出来た。しかし、それらはアルバム

やシングルの印象を良い意味で覆切るようなパワーを伝えておらず、レコードの音の無難な再現という域を出るものではない。不安と期待が半々の状態で公演当日を迎えた。
 6/16日、新宿パワー・ステーションは当然のようにギョウギウギの酒気印状状態。「ライト・ピア、ライト・ナウ」が全米トップ10入りしたことを考えると、このバンドをこんなキャバの場所で見られるのも、多分これが最後の機会だろう。「地獄の黙示録」からサンプリングしたに決まっているヘリコプター音が場内に響きメンバー登場。「ムーヴ・ミー」で演奏が始まった。アランとジェリーがステージ両端を固め、後ろで

ジェンが黙々とドラムを叩く。その間をマイク・エドワーズとバリー・Dが入り乱れてあっちゃこっちゃ走り回る、というのがステージ上の基本的アクション。特にバリー・Dの目立ち方は変わった。笛入りのクラブ・フリークの面目躍如といったところか。マイクはとにかく背がでかく、暗かにステージ映えるするタイプだが、ラストの「プリスト」でギターを持たずに歌う姿は、何だか所在なげな感じに見えた。で、あれよあれよという間に曲を重ね、ライブは変わった。最初のヘリ



ALAN JAWORSKI



BARRY D



GEN

GEN & BARRY D INTERVIEW

“インフォ・フリーコ”のデモを聴いた瞬間、絶対に成功するって確信したんだ

マイク・エドワーズを支えながら大きくなっていくジーザス・ジョーンズのバンド構造論

ジーザス・ジョーンズというのは、いい意味でも悪いでもマイク・エドワーズが手綱を握り引っぱっている。しかし、かといってワンマン体制では決してなく、マイクが中心となりそのまわりを他のメンバーが囲い合うようにしてバンドをスケール・アップさせる。そんな関係なのだ。それを一番よくわかっているのが当のメンバー自身である。ゼロの状態だったというバンド結成時の状況からそんなジーザス・ジョーンズ内の構造まで、マイクとは古い付き合いのドラマのジェンとキーボードのバリー・Dに語ってもらった。

●まずは各々のルーツを教えてください。
 ジェン(以下G)「ゲイリー・グリッターとかT・レックスかな。まだ8歳だったよ」
 バリー・D(以下B)「ジョン・フォックス。初期のウルトラヴォックスが好きだったんだけど、ミッド・ユーロが入ってからはね……。あのチョビヒゲには腹が立つ、あいつは嫌いさ」
 ●バリーはジーザス・ジョーンズが最初のキャリアだそうだけど、その前はこのバンドのファンだったか？
 B「そう、2~3回見たことがあった。なかなかよかったけど、僕みたいな奴を入れればもっとよくなるのって思ってたよ(笑)。いや、マジで。でもそうは思っていない、まさか本気でメンバーになるとは予想してなかった(笑)」
 ●ジェンの方はジーザス・ジョーンズ以前にもマイクと一緒にやってたんですよね？

G「うん、他のどのバンドもマイクと一緒だった。もともとマイクと知り合ったのは彼が高校にギターを持ってきてたからなんだ。それで一緒にやるようになって、ガレージとかでプレイしました。当時はコピーばかりで、どういふ方向に進みたいとか何にもわかっていなかったよ。その後、いろいろなバンドをやったけど、どれもたいしたことなかったな。ロンドンのクラブでやってたぐらいさ」
 ●この時期は収入もなかったってマイクが言ってたけど、めげるようなことってありました？
 G「うん、自分たちのやっつことに信念は持ってたけど、あちこちのクラブで努力したものの、なかなか成果は得られなかったね。だからくじけそうなこともあったよ。それも音に表われちゃったんだらうな。それで、ジーザス・ジョーンズで一からやり直したんだ」
 ●でもラインナップが大幅に変わったわけじゃないし、「ジーザス・ジョーンズもうまくいかないんじゃない」なんて不安はなかったんですか。
 G「いや、それまでやってきた中で一番いいと思ってたよ。既に過去いろいろやってたから何がダメなのかもわかってたんだ。「インフォ・フリーコ」

なんてメンバー全員が揃う前にできてたし」
 B「初めて僕が「インフォ・フリーコ」のデモを聴いた瞬間、「これだ！」って思ったよ。まるでラジオから流れてくるヒット曲のようだった。絶対に成功するって確信したね」
 さっきジェンも言ったように僕たちはゼロの状態からスタートだった。でもそんな強い確信があったからこそ自信もあったんだ。例えばジグ・ジグ・スパトニックが叩き出した時は前評判がすごかったから最初のギグに何千人もの人々が来たけど、ああいうデビューのしかたは嫌だね。だって、そこで待ってる連中はそのバンドをダメにしてやめようって準備ができてるだろ？ 僕たちの最初の頃は8人かそこらだった。けど、そのうちの何人かがライブから帰って他の人に「いいバンドだから見に行こう」って言ってくれたのかもしれない。そうやっていくうちにギグをやる度にオーディエンスの数が増えていったんだ。だから、ゼロからそういうふうになってくを見ていく方がはるかにエキサイティングだったよ」
 ●なるほど。ところで曲作りについてですが、バンド内では具体的にどう決められるんですか。
 B「マイクがデモを作ったりしてきて「この曲なんだけど、こうやったらどうだろう？」とかいって始まるね。そして僕たちがプレイしていく。だから、時には彼が最初に考えてたサウンドじゃないものができるもするんだ」
 G「そう、みんながマイクのオリジナルの部分にいろいろなアイデアをインプットしていくのさ。

